

キャリーバッグ

A roller bag

菅野 萌花

指導教員 谷上欣也

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 プロダクト研究室

キーワード：キャリーバッグ・フィット・事故

1. 研究目的

近年キャリーバッグによる事故が多発しており、その問題がテレビでも多く取り上げられている。また、オリンピックが近づき、観光客もさらに増えるという試算も出ていることから、キャリーバッグの事故を防ぐための取り組みが必要だと考え、使用者だけでなく周りの人にも「安全な」ものを提案することを目的とする。

2. 調査内容

まず、研究対象のキャリーバッグについて理解を深めるために、インターネット調査及び、街頭にて観察調査を行った。

・歴史について

キャリーバッグの歴史は浅く、1972年に登場したキャスター付きスーツケースが始まりと言われている。その後さまざまな研究が重ねられ、現在の主流であるタテ型走行ヨコ開きの形となった。

・市販のキャリーバッグについて

タイプは、耐久性、防水性などがあるハードタイプと軽量性やものが詰め込みやすいなどの利点があるソフトタイプがある。大きさは35Lから81Lのものが多く、値段

も安いものでは3000円台、高いものでは50数万円とかなりの幅が見られる。

・事故例

国民生活センターによると、キャリーバッグにつまずいて、打撲や骨折をしたというケースが最も多く、その次に階段やエスカレーターでキャリーバッグが落ちてきてケガをしたというケースが続く。事故の多くが、キャリーバッグの持ち主が他人にケガをさせてしまうことが多いのが現状である。

近年ではおしゃれでかわいいデザインのキャリーバッグが増え、旅行だけではなく、ビジネスや買い物などで利用する人も増えている。それに伴いトラブルも右肩上がりで増加している。

・観察調査

街頭で、使用人数や階段での持ち方などを調査した。

その結果、観光客だけでなく、日常生活を送る日本人も多く使用していることや階段での持ち方は数種類あることが分かったが、混雑する駅で多くの人が収縮することの出来る取っ手を伸ばしたまま階段を上り下りしていることなどが分かった。そ

の他、階段で混雑しているときに立ち止ってしまうと後ろの人がキャリーバッグにつまずいてしまう、155cm以下の人には段差にキャリーバッグの底をぶつけてしまう恐れがあるということが分かった。

3. コンセプト及びアイディア展開

コンセプト：「離れないデザイン」

・安全

調査により、事故が起きた場合キャリーバッグの使用者が加害者になる場合が多いと分かった。そこで、使用者だけでなくその周りにいる人間の安全も守るものとする。

・大きさ

旅行者は長期休みに集中するが、ビジネスやショッピングは1年中あると考えて、両方に使える手軽な35L以下を対象にする。

4. 提案

階段やエスカレーターの近くである事故の原因を1つでも減少させるために展開を行った。

まず、取っ手にカバーをつけた。取っ手とカバーの間に手を入れて、手を離れにくくすることで、エスカレーターで手を放してしまうことへの抑止力になると考える。また、キャリーバッグの本体の形を台形のような形にして、体にフィットするようにし、掴みやすいように表面に新しく取っ手を増やした。

これにより、155cm以下の人も段差にキャリーバッグの底をぶつけてしまうことが少なくなると考えた。

5. 今後の展開

今後は実物大のプロトタイプモデル作りを行い体とキャリーバッグとの位置関係の確認や持ち手の形状の吟味を行う。さらに、普段キャリーバッグを使っている人に対して検証を行い、改善を進める。



図1 アイディアスケッチ

6. 参考文献

- [1] 国土交通省観光庁：出入国者数、2016, http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in_out.html (参照 2017-07-16)
- [2] 地球の歩き方：スーツケース進化論、2005, http://www.arukikata.co.jp/webmag/2005/0503/sp/050300sp_01_03.html (参照 2017-07-16)
- [3] JAL ショッピング：スーツケースガイド, <https://www.shop.jal.co.jp/disp/006002371/> (参照 2017-07-16)
- [4] 国民生活センター：キャリーバッグでの事故－他人を怪我させてしまうケースもー、2009, http://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20091202_1.html (参照 2017-07-16)